

目次

訳文についての覚え書き V

『内乱史』第5巻 1

第1章 1

共和派の軍が散り散りになり、再集結した次第——戦いの後のオクタウィウスとアントニウス——アジアでのアントニウス、そして彼がエペソスで公衆を前に行った演説——一〇年分の租税の徴収と住民の落胆——アントニウスが東方属州を巡回する——アントニウスがギリキアでクレオパトラと会い、彼女の虜となる——アルシノエ殺害とパルミュラ攻撃の失敗——アントニウスがクレオパトラと会うためにエジプトに向かう

第2章 8

オクタウィウスがローマに帰還する——イタリア人の驚愕、財産没収と土地分配——ルキウス・アントニウスとの問題の始まりと兵士が働いた乱暴狼藉——乱暴狼藉の阻止にあたってのオクタウィウスの無力さ——ノニウスの殺害——不服従と職務放棄とそれらの原因

第3章 12

ローマでの飢餓——ルキウス・アントニウスが三人委員に反対する市民の主張を支持する——ルキウス・オクタウィウス間の調停——新たな問題の発生——ルキウス・オクタウィウス間の戦争準備——今一度の調停が提案される——交渉が決裂する——セクストゥス・ポンペイウスの勢力拡大——アフリカ情勢——武力衝突の始まり——失敗に終わったルキウスへの使節派遣

第4章 18

戦争が勃発し、ルキウスが共和政再興の意向を宣言する——ルキウスがサルウィディエヌスを妨害しようとするも、アグリッパに防がれる——ルキウスの出撃が撃退される——ルキウスの副官たちの支援が失敗する——ペルシアでの飢餓——奴隷に食料が与えられなくなる——ルキウスが突破を試みる——ルキウスが決死の戦いの後に破れる——ルキウスが降伏を考え始める

第5章 23

ルキウスが兵士たちに降伏を告げる——オクタウィウスへの使節派遣——ルキウスがオクタウィウスを自ら訪ねる——ルキウスがオクタウィウスに話をし、無条件で降伏する——オクタウィウスの返答——両軍の兵士たちが互いを抱擁し合う——オクタウィウスが少数の指導者を除いてルキウスと全員を許す——ベルシアが火事で滅ぶ

第6章 29

アシニウス、プランクス、そしてウェンティディウスの軍——オクタウィウスがカレススの軍を掌握する——アントニウスの妻と母がアテナイで彼と合流する——オクタウィウスがアントニウスを疑い始める——この件についてオクタウィウスがルキウスと相談する——アントニウスがイタリアへと出航し、アドリア海でアヘノバルブスと会う——アントニウスがブルンドゥシウムに到着し、そこを包囲する——オクタウィウスがブルンドゥシウムへと進軍する——両軍の兵士たちが親しく交わる——フルウィアの死

第7章 36

ルキウス・コッケイウスによるアントニウスとオクタウィウスの仲裁——コッケイウスとオクタウィウスの会談——コッケイウスがアントニウスの正直ぶりを論じる——オクタウィウスがアントニウスの母に手紙を書く——アントニウスとオクタウィウスの和解——彼らが世界を新たに分割する——アントニウスがオクタウィアと結婚する

第8章 41

セクストゥス・ポンペイウスが穀物供給を遮断してローマが飢餓に陥り、公共広場で暴動が起こる——オクタウィウスが群衆から石を投げられ、アントニウスによって救出される——セクストゥス・ポンペイウスとの交渉——セクストゥスがムルクスを処刑する——セクストゥスがプテオリに赴き、アントニウスとオクタウィウスと会談する——彼らが合意に至る——船上と岸での宴ローマでの大喜び——アントニウスが東方に戻る——アントニウスの越冬

第9章 48

セクストゥスとオクタウィウスの平和の崩壊——アントニウスがブルンドゥシウムに戻る——メノドロスの寝返り——メノドロスがサルディニアとコルシカをオクタウィウスに渡す——オクタウィウスがセクストゥスと開戦し、メノドロスとメネクラテスがクマエで海戦を行う——メノドロスが負傷し、メネクラテスが殺される——オクタ

ウィウスの艦隊が敗れる——ポンペイウスの二度目の勝利——オクタウィウスが岸に流され山地に退く

第10章 53

シキリアの海峡での恐るべき嵐——オクタウィウス艦隊の壊滅——人命の多大な損失——オクタウィウスがウィボに退き、ポンペイウスが追撃をしなかったこと——オクタウィウスがアントニウスに救援を求める——アントニウスが三〇〇隻の船を引き連れて救援に赴く——オクタウィウスとアントニウスの会談——アントニウスがパルティア遠征に転じる——メノドロスがポンペイウスに寝返る

第11章 58

セクストゥス・ポンペイウスに対する新たな遠征——レピドゥスが艦隊をアフリカから連れてくる——別の嵐がオクタウィウス艦隊に被害を与え、遅延させる——セクストゥスがこれらの出来事による優位を活かし損なう——メノドロスが再び裏切る——メノドロスと彼の船がオクタウィウスに引き渡される——オクタウィウスの戦力配置——海でのレピドゥスの災難——アグリッパがヒエラ島を占領する——アグリッパがポンペイウス艦隊を攻撃して勝利を収める

第12章 64

オクタウィウスが海峡を渡ってタウロメニウムに降伏を要求する——オクタウィウスが陸海でポンペイウスによる急襲を受ける——オクタウィウスの艦隊が打撃を受けて四散し、コルニフィキウスがタウロメニウム近くの野営地に残る——オクタウィウスが沿岸に逃げ、陸軍を再集結させる——コルニフィキウスがシキリアを縦断する——コルニフィキウスの軍の恐るべき損害——コルニフィキウスの軍がアグリッパによって救い出される——オクタウィウスがシキリア北岸に足場を設ける——アイトネ山の噴火——ポンペイウスがオクタウィウスに海戦を挑み、これが受け入れられる——激しく長く続いた戦い——アグリッパが勝利を得て、ポンペイウスがメッサナに逃げる——ポンペイウスがシキリアを去り、レピドゥスがメッサナを略奪する

第13章 71

レピドゥスがシキリアを要求する——オクタウィウスがレピドゥスの兵に圧力を加える——レピドゥス陣営で衝突が起こり、レピドゥスが兵士から見放される——レピドゥスが指揮権を剥奪される——オクタウィウスがポンペイウスを追撃しなかったこと——軍内での騒擾——オクタウィウスによる騒擾の鎮圧、オクタウィウスが兵たちに褒美を与えてイタリアに帰還したこと——ローマでオクタウィウスに惜しみなく授け

られた栄誉——オクタウィウスがレピドゥスの殺害を拒む——盗賊退治とオクタウィウスの終身護民官選出

第 14 章 76

セクストゥス・ポンペイウスがアントニウスのもとへと逃げ、アントニウスを支援するか、状況如何では彼に取って代わる計画を立ててアントニウスに使者を派遣する——アントニウスがポンペイウスにティティウスを差し向け、使節団の発言を聞く——ポンペイウスがバルティア人に送った使者をアントニウスが捕まえ、ポンペイウスの二枚舌交渉が発覚する——ポンペイウスがアントニウスの副官たちとの敵対行為を始める——アントニウスがポンペイウスに対抗する援軍を送り、ポンペイウスが友人たちに見捨てられる——夜戦——ポンペイウスがフルニウスに降伏を申し出るが、拒否される——ポンペイウスがティティウスへの降伏を拒み、アミュンタスによって捕らえられる——ポンペイウスがティティウスに引き渡され、処刑される

参考文献..... 84

『内乱史』第5巻

第1章

1 カッシウスとブルートゥスの死後、オクタウィウスはイタリアに帰還した。アントニウスはアジアへと向かってそこでエジプトの女王クレオパトラと会談し、一目で彼女に魅了された。この熱情は彼らに、さらにエジプト全土に破滅をもたらした。このためにこの巻の一部ではエジプトについても論じることになる——しかし大部分を構成する内戦の話に付随する程度のものであるので、題名をつけて述べるには及ばないほど僅かな分量でしかない。カッシウスとブルートゥスの後にも他に同様の内戦が起こったが、彼らのように全軍を率いる司令官はいなかった。後の方の戦争は散発的なものだった。しかし大ポンペイウスの末子でその党派の最後の生き残りだったセクストゥス・ポンペイウスはブルートゥスとカッシウスのように遂に殺され、レピドゥスは三人委員の委員から逐われ、ローマの全ての統治権はアントニウスとオクタウィウスというたった二人に集中した。これらの出来事は以下のようにして起こった。

共和派の軍が散り散りになり、再集結した次第

2 パルメシウスとあだ名されたカッシウス^(一)がカッシウスとブルートゥスによって資金を集めるために艦隊と陸軍と一緒にアジアに残されていた。カッシウスの死後、ブルートゥスの〔辿った〕同様の運命を予見していなかった彼は人員を乗せるためにロドス人の三〇隻の船を選び、これらと一隻の神聖な船を除いて残りは焼き払ったため、ロドス人は反乱を起こせなくなった。これを行うと彼は味方の船とこの三〇隻を連れて出立した。ブルートゥスによって三〇隻の船と一緒にロドスへと送られていたクロディウス⁽¹⁾は——ブルートゥス

(一) この人はスエトニウス（「アウグストゥス」.4）からはカッシウス・パルメンシス（つまりパルマのカッシウス）と呼ばれている。彼はカエサル暗殺者の一人で、ウェレイユス（II. 87）によれば、その中でも最後に滅んだ人物である。キュプロスのクロンミュオン岬から差し出された710年6月付の「財務官カッシウス」からキケロへの手紙があり（『縁者・友人宛書簡集』, XII. 13）、その中では彼と他の人たちの海上での作戦が述べられている。この手紙はガイウスの兄弟ルキウス・カッシウスではなくカッシウス・パルメンシスによって書かれたもので、当時の彼はキケロに知らせている通りトゥルリウス（後述）と一緒に航海中だった。彼らが艦隊を合体させて7節で述べられるようにルキウス・カッシウスがアジアでアントニウスと停戦してアドリア海へと航行した頃にその手紙は書かれたものであろう。パルマのカッシウスは優れた詩人だった。ホラティウス（『書簡詩』, I. 4. 3）を見よ。

(1) ガイウス・クラウディウス。マルクス・ブルートゥスの与党で、紀元前47年にブルー

も最早亡かったために——ロドス人の反乱に見舞われた。クロディウスは三〇〇〇人の兵から成る守備隊を引き上げてパルメシウスに合流した。彼らは、多数の艦隊と以前にロドス人から徴発した多額の資金を有していたトゥルリウスと合流した^(二)。今なおかなりの勢力だったこの艦隊にアジアの様々な地方で任務に当たっていた人たちが参集してきて、彼らはできる限りの兵を乗り込ませ、さらに奴隷、囚人、行く先々の島嶼の住民を漕ぎ手として船に乗せた。キケロの息子とタソスから逃げていたその他の貴族たちが彼らに合流した。こうして瞬く間にかなりの人が集まり、将校、兵士、船舶が組織化された。ブルートゥスに服属させるためにクレタに行っていたレピドゥス^(三)⁽²⁾配下の追加の軍を受け取ると彼らはアドリア湾に漕ぎ出して、大軍を指揮下に置いていたムルクスとドミティウス・アヘノバルブスと合流した。彼らの一部はセクストゥス・ポンペイウスと合流すべくムルクスと一緒にシキリアへと漕ぎ出した。残りの者たちはアヘノバルブスと一緒に留まって一勢力を築いた。カッシウスとブルートゥスの残党の兵力の最初の再集結はこのようなものだった。

戦いの後のオクタウィウスとアントニウス

3 ピリッポイの戦いの後、オクタウィウスとアントニウスは盛大な生贄を捧げて軍を褒美で称えた。勝利の報償を配るため、オクタウィウスは兵士たちに土地を分配して彼らを植民地に住ませようとしてイタリアに向かった。病のために彼はこの事業に選任された。アントニウスは兵士に約束した金を集めるためにエーゲ海の向こう側の諸民族の方へと向かった。彼らは前にしたように自分たちで属州を分配し、レピドゥスから属州を取り上げた。オ

トゥスの捕虜になったガイウス・アントニウスをアポッロニアで見張っていたが、ガイウス救出の動きが出たために彼を殺害した（カッシウス・ディオ, XXXXVII. 24）。他の経歴は不明。

(二) このトゥルリウスはキケロ宛の書簡の中でティッリウス・キンベルの財務官、そして対ドラベツラ作戦を地中海で行った艦隊司令官として二度言及されている（『縁者・友人宛書簡集』, XII. 13）。ウァレリウス・マクシムスによれば（I. 1. 19）彼の死はアスクレピオスを祭った森の木を船舶の建造のために伐採するという不敬虔な所業の賜物だった。

(三) このレピドゥスが三人委員の縁者かどうかは分からない。

(2) パウルス・アエミリウス・レピドゥス。三人委員の一人レピドゥスの兄アエミリウス・パウルスの息子。彼は公権剥奪を被った父と共にブルートゥスのもとに身を寄せたが後に三人委員と和解したようで、オクタウィウスの紀元前36年の対ポンペイウス戦争に参加した。紀元前34年には補欠執政官となり、紀元前22年にはプランクスを同僚として監察官に就任したが、同僚といがみ合っているうちに監察官在職中に逝去した。パウルスはスクリボニアの娘コルネリアを妻とし、その後にはオクタウィウスの姉オクタウィアの娘クラウディア・マルケツラと結婚した。

クタウィウスの求めでガリア・キサルピナ^(四)は老カエサルが意図した通りに手付かずにされることになった。レピドゥスは三人委員の職責からポンペイウスに寝返ったと告発された。もしオクタウィウスがこの告発がでっち上げだと了承すれば、他の属州はレピドゥスに渡されるべしと決められた。彼らは〔軍への〕残留を求めた八〇〇〇人を除いて満期務めた兵を軍務から退役させた。彼らは彼ら〔軍隊に残留した兵たち〕を引き戻して自分たちの間で配分し、彼らから親衛大隊を編成した。ブルートゥスのもとから来た兵を含めれば彼らのもとに残留したのは一一個軍団と一四〇〇〇騎の騎兵だった。このうち外征のためにアントニウスが六個軍団と一〇〇〇〇騎の騎兵を取った。オクタウィウスは五個軍団と四〇〇〇〇騎の騎兵を取ったが、アントニウスがカレヌス指揮下でイタリアに残していた他の部隊と引き換えに彼はこのうちの二個軍団をアントニウスに渡した。オクタウィウスはアドリア湾へと進んだ。

アジアでのアントニウス、そして彼がエペソスで公衆を前に行った演説

4 アントニウスはエペソスに到着するとこの都市の女神に盛大な生贄を捧げ、ブルートゥスとカッシウスの破滅の後に嘆願者として神殿に逃げ込んでいた人たちを許したが、カエサル暗殺に関与していたペトロニウス^(三)とラオディケイアでドラベツラを裏切ってカッシウスについたクイントゥスは例外だった。ギリシア人、ペルガモス周辺のアシア地方に住む他の人たち、和平を求める使節として臨席していた人たち、召喚されたその他の人たちが参集してくると、アントニウスは彼らに以下のように述べた。「おおギリシア人よ、諸君のアッタロス王^(四)は遺言で諸君を俺たちに託し、俺たちは自分たちがアッタロス以上に諸君に対して善良であることを直ちに証明したが、それは彼に納めていた税から、俺たちの中の大衆扇動者が必要とするようになる^(五)までの間は諸君を解放したからだ。この税が必要になると、俺たちは所定の査定に則って諸君に税を課すのではなく決まった額を徴収することもできたが、諸君らと季節の移り変わりを分け合うために毎年の穀物の一部を納めるよう諸君に求めた。元老院の権限でもって税を徴収した徴税請負人が適正額以上を要求して諸君を苦しめると、ガイウス・カエサルは諸君が彼らに納めた額の三分の一を免除して彼らの怒りを

(四) カエサルはガリア・キサルピナに残りのイタリアと同等の市民権と政治的権利を持たせることを意図していた。この意図は今になって実現した。

(三) クイントゥス共々詳細不明。

(四) 最後のペルガモン王アッタロス三世。少年時代をローマで人質として過ごし、叔父アッタロス2世の後を襲って紀元前138年に王位につくと政務を顧みず彫刻や医学、植物学、園芸に没頭した。紀元前133年の崩御に際して王国をローマに遺贈し、王国はローマの属州に編入された。

(五) アッタロスの遺産と遺領をローマ市民に分配するというティベリウス・グラックスの動議を指すものであろうか（プルタルコス、「ティベリウス・グラックス」,14）。